

防災・減災の輪

かがわ自主ぼう連絡協議会
会報 第34号 (2009 12)
事務局川西地区自主防災会

2010年 かがわ自主ぼう 飛躍 発展を

香川県防災局長 川部英則

かがわ自主ぼう連絡協議会の皆さん 新年あけましておめでとうございます。

旧年中、皆様方には多大なご尽力をいただき、誠にありがとうございました。今年も、引き続きご支援いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

昨年を振り返ると、我が香川県にとって、災害の少ない比較的穏やかな1年でありました。しかし、山口県や兵庫県佐用町の集中豪雨による被災地の報道は、記憶に新しいところであり、同じようなことが何時、どこで起きてもおかしくないと言われています。さらには、インドネシア沖の地震により、被災地は今も苦闘が続いているようです。

ところで、西日本が地震の活動期に入ったといわれるのが阪神・淡路大震災。平成7年、西暦1995年のことです。以来、西日本では不思議なことに5年ごとに大きな地震が発生しています。2000年には、鳥取県西部地震(M7.3)、2005年福岡県西方沖地震(M7.0)。そして、今年2010年。私の個人的な予感が不発に終わることを祈っておりますが、改めてそれぞれの家庭、地域、職場での備えに力を注いでいただきたいと思います。

災害発生を防ぐことはできませんが、被害を減らす「減災」は可能です。もし、南海地震が発生したと仮定すると、今の想定では、香川県の死者数188人、負傷者数3,324人、罹災者数34,096人、避難者数10,232人、全壊家屋4,567棟、半壊家屋17,414棟と予想されています。しかし、高知県や徳島県の被害予想は本県をはるかに上回るものとなっています。太平洋側は高さ10m級の津波を始め、甚大な被害に見舞われ、マスコミの目や救援物資、ボランティアなどの支援、自衛隊や緊急消防援助隊などは太平洋側に集中し、瀬戸内側は自力で救助、救護していかなければならなくなるのではと危惧されます。



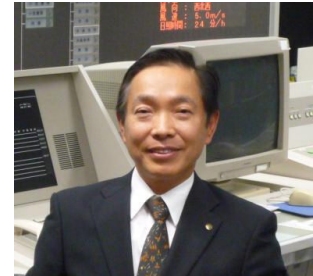
重要性が高まる防災教育

2005年の福岡県西方沖地震では、大人が漁に出払い消防団員が殆ど残っていなかった姫島で、小中学生たちが津波の危険性を感じ、一人暮らしのお年寄りに次々と声をかけ、足の不自由な人はリヤカーに乗せるなどして、高台まで避難しました。スマトラ大津波を覚えていた子どもたちが、臨時的に自主防災活動を行った素晴らしい事例です。

香川県でも、共助の中心的な役割を担う自主防災組織の強化が重要です。現在の県内の組織率は約6割。

その中心的な役割を担っていただいているのが、かがわ自主ぼう連絡協議会の皆さんです。全国でも、こうした協議会はいくつかあるようですが、行政主導でなく、文字どおり自主的な結成・運営が行われているのは本県だけだと思います。

結成3年となり、組織数も増え、活動内容も充実が図られてきており、我々も、皆さんのす



ばらしい活動をしっかり応援していきたいと考えておりますので、引き続き、よろしくお願い申し上げます。

最後になりますが、かがわ自主ぼう連絡協議会の今後ますますのご発展と会員皆様のご健勝、皆様のご家族のお幸せを祈念いたします。

本年もどうぞ、よろしくお願いいたします。

かがわ自主ぼう研修会 リポート

平成 21 年 12 月 6 日（日）14：30～17：15

高松サンポート e-とびあ・かがわにて

出席者 105 名（高松市 54 名、丸亀市 33 名、さぬき市 4 名、多度津町 5 名、県防災局 3 名、香川大学 1 名、e-とびあ 5 名）



1、事例発表

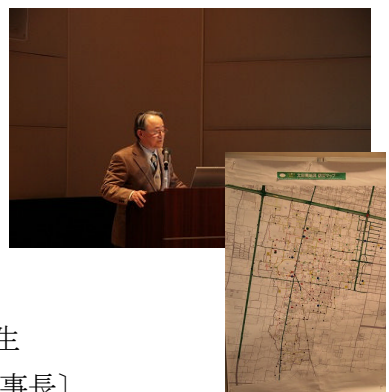
(1) さぬき市大川町坂の下防災会

寒川会長より、防災会立上げの経緯や、苦労話を紹介された後、平成 20 年度の活動について説明がありました。会長さんは高知県のご出身とのことで、身体の中に「災害に対する」熱い思いを抱いており、発表の中で、そのハートと熱意を見せていただきました。



(2) 高松市太田南地区コミュニティ協議会

地域住民自らが企画し、実行する、防災のまちづくり事業について、防災副部長の土岐さんから、「地区別防災マップの作成」「地区震災対策訓練・救命講習会の開催」などの取組みについて、発表していただいた。



2、記念講演

「東海地震への備えー市民との訓練」 講師 安田 清 先生

[静岡県立総合病院 副院長、NPO 法人災害・医療・町づくり 理事長]

「テーマは東海地震の備えとなっていますが、これを南海地震に置き換えて話を聞きたい」と切りだした安田先生は、阪神淡路震災時の医療チームとして生々しい体験をされており、1 時間 40 分にわたってリアリティのあるメリハリの利いたお話に参加者全員堪能されておりました。

講演のポイント

(1) ” おらが町は”・・・足元をしっかりと見つめる

- ・どんな被害が想定されているのか
- ・誰がどれだけ助けてくれるのか？
- ・地域で何ができるのか
- ・どんな準備をすればいいか



(2) 阪神・淡路で学んだ教訓

- ・ 3日間しのげば何とかなる
- ・ ケガは最初の2日間、以降は内科的疾患、特に感染症
- ・ 情報発信しないと援助は来ない
- ・ 情報はほとんど入らない
- ・ 死亡の分析、90%は瞬間死、5%は生きていて病院に着く前に死亡、あとの5%は、病院へたどりついて死亡

(3) クラッシュ症候群

(ア) 何故大事か？

- ・ 病院での一番多い死因 ・ 7割が集中治療を受けた
- ・ 普段見ない疾患 ・ 救出後、急速に死に至る

(イ) 診断

- ・ 赤ワイン色の尿が出る
- ・ 血圧、脈拍、呼吸、意識などまったく異常を認めない
- ・ 挟まれていたところも赤くなっている程度

(ウ) どうしたら助かるか・・・

- ・ 早く掘り出す（2時間以内）
- ・ 2時間以上の場合は、掘り出す前に水を
- ・ 四肢の根元で、しばって掘り出す
- ・ 透析できる施設（病院）へ直ちに運ぶ

(4) 医療と住民との合同訓練（9年間連続実施）

- ・ トリアージ訓練
- ・ 救護所立ち上げ訓練
- ・ クラッシュ症候群の啓発
- ・ 倒壊家屋からの救出訓練
- ・ 病院までの搬送訓練

最後に！**直面する景色を想像**して防災の準備・訓練は**何が必要か**を考えるべきである。

以上